

古典の教材化—組合わせ法をめぐって

—『おくのほそ道』を中心として—

浮橋康彦

高校生に古典を読ませる時に、「どのように興味深く、読ませるか」ということを、第一義的に心掛けたと思う。そのために、

- ① 作家・作品の本質的なものに迫る。
- ② 学習者自身に発見的な読みを促す。

ということをも、基本的なねらいとして、授業を構想する。具体的には、中核教材とそれにかかわる適切な複数の教材を組合わせることによって、右の二つのねらいを実現したいと考えている。その理由は、次の二点にある。

- ① 一教材のみに閉ざされた学習では汲みつくせない、文学としての本質的なおもしろさを、適切な教材の組合わせによって味わわせる。
- ② 複数教材を取扱うことは、学習上困難度を増すように思われがちであるが、組合わせが適切であれば、相互に解釈のヒントを提供する機能をはたすから、かえって学習をおもしろくし、活性化する。

小稿は、松尾芭蕉の「おくのほそ道」を中核とし、他の諸教材をこれに組合わせることで、それぞれの解釈を深め、芭蕉文学の本質

に迫る体験をさせる授業構成の試案である。

A 月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり笠の緒付かえて、三里に突すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家
面八句を庵の柱に懸置。

B 弥生も末の七月、明ぼの空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ほそし。むつまじきかぎりには宵よりつとひて、舟に乗て送る。千じゅうと云所にて船をあげれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゞく。

④ 行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なをすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かけのみゆる迄はと見送なるべし。

右、冒頭の二節を中核教材として、次の三つを参考・関連教材とする。

C 身のうさを嘆くにあかであくる夜はとり重ねてぞ音も泣かれける(空蟬)

ことゝ、明くなれば、(源氏は)障子口までおくり給ふ。内も外も、人さわがしければ、ひきたてゝ別れ給ふほど(源氏は)心ほそく、「へだつる関」と見えたり。(源氏は)御直衣など着給ひて、南の勾欄に、しばし、うちながめ給ふ。西おもての格子そゝきあげて、人々(源氏を)覗くべかめり。實の子の中の程に立てたる、小障子の上より、ほのかに見え給へる(源氏の)御有様を、身にしむばかり思へる、すき心(の女房)どもあめり。月は有明にて、光をさまれる物から、影さやかに見えて、なか／＼をかしき曙なり。何心なき空の気色も、たゞ見る人から、艶にも凄くも、見ゆるなりけり。人知れぬ(源氏の)御心には、いと胸いたく、(空蟬に)言つて入れんよすがだきなきを、(源氏は)かへり見がちにて出で給ひぬ。(源氏物語「帚木巻」)

D 少無適俗韻 性本愛邱山

誤落塵網中 一去十三年

⑤ 羈鳥恋旧林 池魚思故淵

開荒南際 守拙婦園田

(以下略) (陶淵明「歸園田居五首」其一)

E 行く春を近江の人とおしみけり ばせを

先師曰く「尚白が難に、近江は丹波にも、行く春は行く歳にもふるべし、といへり。汝いかゞ聞き侍るや。去来曰く「尚白が難あたらず。湖水朦朧として春をおしむに便り有るべし。殊に今日の上に侍る」と申す。先師曰く「しかり。古人も此国に春を愛する事、おさ／＼都におとらざる物を」。去来曰く「此一言心に徹す。行く歳近江にぬ玉はゞ、いかでか此感ましますん。行く春丹波にゐまさは、本より此情つかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、真成る哉」と申す。先師曰く「汝は去来、共に風雅をかたるべきもの也」と、殊更に悦び玉ひけり。 (去来抄)

「おくのほそ道」冒頭部Aの傍線部①「古人も多く旅に死せるあり。予も……」の行文が、芭蕉の文学の本質に触れるものであり、かつ「旅」において「古人」と「予」とを結び発想にもとづくことを、さらに深く理解させるためには、そのことに関する教師の言葉を尻しての説明よりも、Eの「去来抄」を教材として与え、①「古人も此国に春を愛する事……」という古人回帰の発想が、「行く春を近江の人とおしみけり」の句の基底にあることをわからせる方が、よほど効果的である。「おくのほそ道」と「去来抄」とを組み合わせることによって、芭蕉文学の本質的な一面を、直接的に、発見的に、理解させることができる。

Bの②「明ぼの、空蟬々として、月は在明にて光……みえて」は、C「源氏物語」「帚木巻」の、光源氏と空蟬とのきぬぎぬの別れの場面と重ねて読ませることによって、俳文のおもしろさを理解させることができる。

Bの行文の大切な要素である②「月は在明……」や、③「心ほそし」、④「行道なをすゝまず」、⑤「人々は途中に……なるべし」は、よく見ると、「源氏物語」「帚木巻」の中に、③「月は有明にて……さやかに見えて」、④「心ほそく」、⑤「かへり見がちにて出で給ひぬ」、⑥「人々覗くべかめり」など、極めて相似た表現が見出されるのである。

もちろん「源氏物語」「帚木巻」の引用部は、美青年の貴公子が女の家を辞するきぬぎぬの色っぽい場面で、「心ほそ」いのは女との別れの悲哀であり、「人々」が覗くのは、女房たちが美青年光源氏を見ているのであり、「かへり見がち」なのは、光源氏の女への未練である。それを芭蕉は自分の旅立ちの場面の描写の下敷きにしたのである。芭蕉の「心ほそし」は離京の思い、「行道」が進まないのである。「人々」が「見送る」のも、師弟の別離の哀愁である。だいたい、主人公は、美青年の貴公子ならぬ、若い枯れた乞食姿の旅人である。

ここに芭蕉の洒落があり、俳味がある。

若いたるわびしい旅人の自己を描くのに、王朝文学の美青年の描写を下敷きにしたところに、近世文学のパラドキシカルなユーモアを見出すことができる。

いったいに近世文学は、そのような特色を持っている。たとえば、

井原西鶴の「好色一代男」の冒頭の章で、主人公世之介を紹介するに、

「五十四歳まで、たはふれし女三千七百四十二人……」

とある。これは明らかに「源氏物語」五十四帖と、「伊勢物語」の在原業平の愛人が三千七百三十三人であったという伝説とをふまえたパロディである。この短い一行に、西鶴は平安文学の二人の好色貴族を下敷にして、近世の好色児世之介を創造したことを暗示したのであった。芭蕉の場合は情緒において西鶴と対蹠的に異なるけれども、貴公子のきぬぎぬの艶めいた場面に重ねることによって、わびの老旅人である自己の姿をパラドキシカルに強調したのである。

同じ「別れ」にしても若き男女のきぬぎぬの別れと、老骨旅立ちの師弟の別れとを、非常によく似た表現で連想的に重ね合わせることによって、つむぎ出した文学のおもしろさを発見させたいものである。

さてBには、傍線④「行春や鳥啼魚の目は泪」の句があるが、この句には、教材Dの陶淵明の「帰園田居五首」其一を、関連教材として組合わせたい。(小稿には省略したが、この詩の中には「方宅十余畝 草屋八九間」という詩句があり、Aの句の「草の戸も……」に通う印象がある。芭蕉の句の「鳥啼」は、「羈鳥恋旧林」、「魚の目は泪」には「池魚思故淵」が背景として、芭蕉の意識の中に生きていたことを思わせる。ことに、旅立ちの文章に「羈鳥」はふさわしい。「上野谷中の花の梢又いつかはと心ほそし」は、江戸を故郷とみなす心意の動きとして、「思故淵」との連関が感じられる。

このD教材は教科書に採用されることの多い漢詩であるが、それだけに、「おくのほそ道」に結びつけて読ませたい教材である。

F 三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は……(略)……楮も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

には、当然、次の漢詩を組合わせることが必要になる。

G 国破山河在 城春草木深
感時花灑淚 恨別鳥驚心
烽火連三月 家書抵萬金
白頭搔更短 渾欲不勝簪

(杜甫「春望」)

右の⑦・⑧の連関は、説明する要もないほど周知のことであるが、生徒に「おくのほそ道」を「春望」との關係で読ませることによって、前に述べた、A「古人も多く旅に死せるあり。予も……」、E「古人も此国に春を愛する事……」とのつながりの上で、古人回帰という芭蕉の文学の基盤を確かに理解させることができよう。

もう一つ大切なことは、芭蕉と曾良との呼応である。芭蕉の「夏草や……」の句と、曾良の「卯の花に……」の句とは、義経の「義臣」「兵ども」と「兼房」との連関で呼応していることは明らかである。芭蕉が「夏草」と「兵ども」で句をなしたに對して、曾良は

「卯の花」と「兼房」で句をなした。師弟呼応の呼吸である。しかし、それだけではない。芭蕉が「夏草や」の句を作った時に、曾良は師の詩想の中に、「草木深」を推察したのであろう。あるいは芭蕉自身その場で「国破山河在」の詩句を口ずさんだかもしれない。いずれにしても曾良は、師芭蕉の詩想の背景に杜甫の「春望」を推察し、その詩の中の「白頭搔更短」の一句を思い浮かべたにちがいない。師の「兵ども」の焦点として「兼房」の「白毛」を詠みこんだ曾良の発想は、師の「春望」想起の延長線上にある。つまり「春望」を土台として、師弟は同じ発想の座に立ったのである。

「春望」を芭蕉の文章の一部分の注釈のために利用するのみでなく、「春望」全文を対象とすることによって、師弟呼応の俳文学の機微を知ることができる。俳諧は「座の文学」である。この場面で芭蕉と曾良の「座」を形成した基因が杜甫の「春望」なのである。

H 酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ふりの関に到る。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡に横たふ天河

I 北陸道に行脚して越後ノ国出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里によこおりふした。みねの峻難谷の隅々まで、さすがに手にとるばかりあざやか

に見わたさる。むべ此嶋はこがねおほく出て、あまねく世の宝となれば、限りなき目出度嶋にて待るを、大罪朝敵のたくひ、遺流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半夫にかくりて、星きら／＼と冴たるに、沖のかたより、波の者しは／＼はこびて、たましるけつるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なゆへとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

「銀河の序」

教材Hについては、教材Iを組合わせることが何より肝要であると思う。これらを並べるだけで、「おくのほそ道」の「荒海や」の句の解釈は、ほとんど教師の説明を要しないほどに生徒の中に創造されるであらう。

「おくのほそ道」だけを読んだ場合、「荒海の彼方に佐渡が見え、夜空には銀河がかかっている。何というさびしい風景よ」といった程度にしか、解釈できないにちがいない。けれども教材I「銀河の序」を組合わせた時に、この句の深い解釈が成立つ。

「銀河の序」によってこの句を見れば、「佐渡」は流刑の島というイメージでとらえられている。「流刑の島」と「天の河」とをつないで読む時に、この句の本質が見えてくる。そしてまた、「文月や」と「荒海や」の句が並べられている呼応の意味も読み生かされ

てくる。

以上のことを一括すれば……、七夕の夜は天の河を渡って、男女二星が年に一度の逢瀬を楽しむ夜である。だから「六日も常の夜には似」ない、一種の色っぽい感情を催させるわけである。ところがそれは天上の話。この地上では、「手にとるばかりあざやかに見わたさ」れる、至近の地である佐渡には、奈良時代以来の、多くの流罪人たちの魂が眠っている。現に、当代の流刑に苦しむ多くの罪人たちもこの夜を眠っているであらう。彼ら（の魂は、「本土に帰りたい、この海を渡って、もとの暮しにもどりたい。」というはかない念願を今も持ちつつづけているであらう。天上では二星が天の河を渡るといふのに、地上では、眼前のせまい佐渡海峡を、渡るに渡れない、悲しい魂が泣いている。——という芭蕉の詠嘆である。

実のところ、佐渡海峡が「荒海」になるのは十月、十一月になってからであって、芭蕉が出雲崎に泊った七月四日（新暦で八月十八日）ごろは、ごく穏やかな海である。その実景を「荒海」というイメージでとらえたのは、流罪人が渡るに渡れないという状況を実景にかぶせたためである。

こう見てくると、「文月や」の二星逢引きのロマンチックな句と、「荒海や」の荒涼たる叙景句とが並べられている（逆説的な）呼応が理解できる。

前に「荒海の彼方に佐渡が見え」という解釈を記したが、実は夜景においては見えないはずがない。芭蕉は見えない佐渡を、心に思い浮かべているのである。「沖のかたより、波の音しは／＼はこびて」とは、「沖のかた」つまり見えない佐渡の方から寄せてくる波の音

に、流罪人たちの鬼哭歌々たる悲しみの声を聞き取ったということの、象徴的表現である。だからこそ、その「波の音」を聞くだけで、「たましゐるげづるがごとく、腸ちぎれて、そとろにかなしびきたれば」という、いささか深刻すぎるような表現が導き出されたのである。波の音に流人の声を聞いたとすれば、これは当然の悲愁の詠嘆であつた。

前に、古人回帰の心意が芭蕉の本質の一面であることを、「おくのはそ道」の冒頭(教材A)と、『去来抄』(教材E)によつて述べた。この「荒海や」の句においても、その背景に順徳天皇はじめ流罪の古人たちへの思いが潜在している。「風光の人を感動せしむる事、真成る哉」(去来抄)とは、古人回帰をも、含んだ、詠嘆を言い当てているのであつて、そのことはこの「荒海や」についても適応する。

ここで「去来抄」の論法を借りれば、七夕の夜、(実は七月四日であるが、佐渡を望む出雲崎に居たればこそ、(古人回帰を含む)風光が芭蕉を感動させたということになる。

(なお、教材Hの波線部(⑩・⑪)については、後にふれる。)

J 今日(今日は)親しらず・子しらず、犬もどり・駒返しなど云北国一の離所を越つたかれ侍れば、枕引よせて寝たるに、一間隔て面の方に、若き女の声二人計ときこゆ。年者たるおのこの声も交て物語するをきけば、越後の国新潟と云所の遊女成し。伊勢参宮するとて、此関までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文したくめて、はかなき言伝などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、

あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因いかにつたなしと、物云をきく／＼寝入て、あした旅立に、我々にむかひて、^⑩「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へ」と泪を落す。「不便の事には侍れども我々は所々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず慈なかるべし」と云捨て出つ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月
曾良にかたれば書とゞめ侍る。

この部分の背景には、芭蕉存疑作「海に降雨や恋しき浮身宿」(新潟にて)や、山中温泉での連句「遊女四五人田舎わたらひ 曾良／落書に恋しき君が名も有て 翁(芭蕉)」との連関が指摘されるし、「新古今和歌集」巻十、「世の中を厭ふまでこそ難からめかりのやどりを惜しむ君かな 西行」「世を厭ふ人としきけば仮の屋に心とむなと思ふばかりぞ 遊女妙」の応答歌、及び、それをもとにした「撰集抄」「江口遊女歌之事」との関係が考証されている。

右のような素材源の存在も否定できないが、私はむしろ謡曲「山姥」との関係を大切にしたいと考える。「山姥」の舞台は市振の近く上路の山中であり、そこに「山姥の洞穴」なる伝承が残っている。芭蕉が市振の宿に泊った夜、土地の人に「山姥の洞穴」の伝説を聞いたであろうことも考えられるし、謡曲に造詣の深い芭蕉にしてみれば、市振が「山姥」の舞台である上路に近いことが念頭にあつた

にちがいないとも考えられる。そのことを背景にして謡曲「山姥」を讀むと、芭蕉の「おくのほそ道」の行文や構成と極めて近い表現が散見されることに気づくのである。そこで「山姥」を一部原文を交えながら、次のように教材化して与えたいと考える。

K 「山姥」ツレ遊女百魔山姥、ワキ一従者、ワキツレ二人、

シテ一山姥

(ワキ・ワキツレ)「善き光ぞと影たのむ〜」。

仏の御寺尋ねん。これは都方に住居仕る者にて候。またこれに渡り候ふ御事は、百魔山姥とて、隔れなき遊女にて御座候。

かやうに御名を申すいはれば、山姥の山廻りするといふ事を曲舞につくつて、御謡ひあるにより、京童の申しならはして候。またこの頃は善光寺へ御参りありたき由承り候ふ程に、

某御供申し、唯今信濃国の善光寺へと急ぎ候。」

(遊女)「都を出でてさざなみや、志賀の浦舟こがれ行く。末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙かなれ。梢波立つ汐越の〜、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の、罪を斬る弥陀の剣の砥並山、雲路うながす三越路の、国の末なる里問へば、いと都は遠ざかる、境川にも着きにけり〜」。

(ワキ)「御急ぎ候ふほどに、これははや越後・越中の境川に御着にて候。暫くこれに御座候ひて、なほ〜道の様体をもお尋ねあらうするにて候。」

(遊女)「げにや常に承る。西方の浄土は十万億土とかや。これは

また弥陀来迎の直路なれば、上路の山とやらんに参り候ふべし。とても修行の旅なれば、乗物をばこれにとどめ置き、徒はだしにて参り候ふべし。

△と言つて山路を行くと、急に日が落ちて、シテ(山姥)が出現する。▽

(山姥)「なう〜旅人、御宿まるらせうなう。これは上路の山とて人里とほき所なり。日の暮れて候へば、わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ。」

(ワキ)「あらうれしや候。俄に日の暮れ、前後を忘れて候。やがて参らうするにて候。」

△シテ(山姥)は、旅人であるツレ(遊女百魔山姥)に対して、せびとも「山姥の山めぐり」という曲舞をうたつてほしいと要求する。そして、次のように恨みかつ懇請する。▽

(山姥)「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさふらははずや。年ごろ色にはいださせ給ふ、言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ。恨み申しに来りたり。道を極め名を立て、世情万徳の妙花を聞く事、この一曲の故ならずや。然らば妾が身をも用ひ、舞

歌音楽の妙音の、声仏事をもなし給はば、なか妾も輪廻をのがれ、婦性の善所に至らざらんと、恨をゆふ山の、鳥獸も鳴きそへて、声を上路の山姥が、霊鬼これまで来りたり。」

(遊女)「不思議の事を聞くものかな。さては真の山姥の、これまで来り給へるか。」

(山姥)「我國々の山めぐり、今日しもここに来る事は、我が名

の徳を聞かん為なり。謡ひ給ひてさりとては、我が妄執を晴らし給へ。」

△そこで遊女の百魔山姥が、曲舞をうたい始める。すると、前ジテがいったん姿を消して、恐ろしい姿、顔かたちの山姥（後ジテ）が出現する。▽

（後ジテ・山姥）「あらもの凄の深谷やなく。寒林に骨を打つ。霊鬼泣くく前生の業を恨む。深夜に花を供する天人。かへすくも幾性の善をよるこぶ。いや。善悪不二。何をか恨み、何をか喜はんや。万箇目前の境界。懸河渺々として、敵賊々たり。山又山、いづれの工か、青巖の形を、削りなせる。水また水、誰が家にか碧潭の色を、染め出せる。」

△このあと、山姥と遊女百魔山姥との問答があつて、謡の掛合いとなる。その中に、次の文言がある。▽

（山姥）「しかれば人間にあらずとて、（地）隔つる雲の身をかへ、仮に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色即是空そのまゝに、仏法あれば、世法あり。煩惱あれば、菩提あり。仏あれば衆生あり。衆生あれば、山姥もあり。柳は緑、花は紅の色々……」

……都に帰りて世語にせさせ給へと、思ふはなほも妄執か。唯うち捨てよ何事も、よしあしびきの山姥が、山めぐりするぞ苦しき。あしびきの山めぐり、一樹の蔭、一河の流、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや我が名を夕月の、浮世をめぐる一節も、

狂言綺語の道すぐに、讚仏乘の因ぞかし。あら、御名残惜しや。いとま申して帰る山の……（中略）めぐりくって輪廻を離れぬ、

妄執の雲の、塵つもつて山姥となれる、鬼女が有様、みるやくくと峯にかけり、谷に響きて今迄く、に、あるよと見えしが山又山に、山めぐり、山又山に、山めぐりして、行方も知らず、なりにけり。（終）

「おくの細道」の教材J「市振の遊女」に入る前に、教材Hの波線⑩・⑪について述べておきたい。⑩「遙々のおもひ胸をいたまじめて」は、謡曲「山姥」の波線⑩「かけて末ある越路の旅、思ひや、こそ通かなれ」にあまりにも通じる表現である。しかも土地は同じ「越路」である。特に大切なのは、「おくのほそ道」の⑩に、「越中の国一ぶり（市振）の関に到る」が芭蕉の錯覚で、市振は「越後の国」でなければならぬ点である。なぜこのような錯覚が芭蕉の脳裏に生じたか。教材Kの謡曲「山姥」の⑩に、「越後・越中の境川に御着にて候」とある。遊女百魔山姥の一行は、京から北陸道を通つて、越中側から境川に着いた。境川は市振（越後）のすぐ西を流れている。芭蕉は越後の側から境川の手前の市振に着いた。この時芭蕉の脳裏に一つの錯覚が生じた。芭蕉の念頭に「山姥」の一節が潜在していたとすれば、遊女百魔山姥が境川を越えて市振の奥の上路に登ったことが意識の底にあつて、芭蕉自身もまた境川を越えたところで（越中の国）市振に着いたと思ひこんだのではあるまいか。——この芭蕉の錯覚・誤記はいよいよ「山姥」が念頭にあったことを思わせるのである。

さて、以上を前提にして、教材JとKとを比較すれば、多くの類似点を見出すことができる。「おくのほそ道」——「山姥」の順で、

傍線同番の連記の形で示す。

⑭新瀧と云所の遊女成し。——隠れなき遊女にて御座候。

⑮伊勢參宮するとして、——善光寺へ御参りありたき由

⑯此関までおのこの送りて、——某御供申し、

⑰あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因いかにつたなしと——妾も輪廻をのがれ。泣くく生前の業を恨む。

輪廻を離れぬ、妄執の雲の……

⑱行衛しらぬ旅路のうさ、——行方も知らず、なりにけり。

⑲衣の上の御情に、大怒のめぐみをたれて結縁せさせ給へ。——我が妄執を晴らし給へ。一樹の蔭、一河の流、皆これ他生の縁ぞかし。

⑳神明の加護かならず恙なかるべし。——狂言綺語の道すぐに、讃仏乗の因ぞかし。

右のように見てくると、最も重要な焦点である、㉑「一家に遊女もねたり萩と月」の句もまた、「山姥」との関係で深い解釈を見出すことができる。Kの謡曲「山姥」では鬼女の山姥が、遊女の百魔山姥を、㉒「御宿まらせうなう。」「わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ。」と誘っている。つまり、鬼女と遊女の両「山姥」は一つ、庵（伝承では洞穴という）で夜を明かしたのである。「おくのほそ道」の㉓の句は、もちろん「芭蕉の泊った一つ家に、遊女も寝ている」状態を詠んでいることに間違いないが、この句の背景に謡曲「山姥」を置いてみると、上路の洞穴（庵）の「一つ家」に、主の鬼女山姥のほかには遊女山姥も寝ているという情景が重なってくる。芭蕉は上路の鬼女山姥の一つ、庵を下敷にして、市振の宿での遊女と一家

同宿の句をなしたと推定されるのである。謡曲「山姥」には、「月も木深き山陰より」後ジテが登場することになっている。「萩と月」の「月」の素材ではないか。

新瀧の遊女が百魔山姥であり、芭蕉が鬼女山姥である、というようなストレートな対応を言っているのではない。むしろ新瀧の遊女が、謡曲の山姥とひとしく「日々の業因」の苦惱を訴えているのであって、この新瀧の遊女の中には、遊女百魔山姥と、妄執の業因にさいなまれる鬼女山姥のイメージがダブっているとも言えよう。いずれにしてもこの「市振の遊女」の節は、「江口の遊女」とともに謡曲「山姥」のパロディを含んだ、(事実としては無かったらしい)芭蕉の懐古的、古典回帰的虚構の作品である。

以上のことは、「市振の遊女」の節の注釈として、教師が解説を施せばよいというものではない。前にかかげたKのような、原文と△つなぎ解説△を連ねた教材を与え、比較対照的に読ませることによって、生徒自身に類似部分の発見、ひいては芭蕉の創作の方法の発見といった、発見的な読みを経験させたいものである。芭蕉の文学と、その源泉・背景・素因というものを、生徒個人、あるいはグループで発見的に考察させることは、「古典をおもしろく読む」場面を開拓することにはかならない。(なお、つけ加えておきたいことだが、K「山姥」の二本傍線を付した、「いづれの工か、青巖の形を、削りなせる」は、「おくのほそ道」「松島」の「造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ」に通う印象がある。)

「おくのほそ道」の教材化には、中途省略部分が多いことはやむ

を得ないとしても、最後の「大垣」だけは欠かしてはならないと思う。ここには露通・曾良はじめ「したしき人々日夜とぶら」ふことがいねいに記されている。これは「旅立ち」の教材B「むつまじきかぎり、は宵よりつどひて」に遠く対応しており、「大垣」の「又舟にのりて」は、教材Bの「舟に乗て」に対応している。旅立ちが舟であり、旅の終りが、再び「舟」による新しい旅立ちであるという首尾の呼応である。

そしてさらに、教材Bの句が「行春や鳥啼魚の目は泪」であったのに対して、最終の句が「始のふたみいわかれ行秋ぞ」と対応しているのである。その上に、「市振の（新潟の）遊女」が伊勢参宮を志したように、芭蕉もまた伊勢を目ざして、紀行の筆をおいているところにも、一つの意図を見出すことができる。

『おくのほそ道』を、節ごとの断片として読むのではなく、全巻を通して構成の行きとどいた紀行文として読ませるために、最終節は不可欠の教材である。

それとともに、以上に掲げたような、芭蕉自身の俳文や、古典物語、漢詩、謡曲など、多様な教材を組合わせて、中核教材である『おくのほそ道』の解釈をいっそう深めることができる。ことに、芭蕉における古人への回帰や古典のパロディは、その文学の本質と言えるのであるから、適切な古典教材の組合せは、芭蕉の本質に迫るとともに、古典の読みを立体化し、興味深くする、最も有効な方法であると言えよう。

（本学部教授）

（五九・一〇・一）

※芭蕉のテキストは岩波大系本を、謡曲は「名著全集」本を使用し

た。本稿は、昭和五十九年八月三日、全国大学国語教育学会（東京茗溪会館）での発表に手を入れたものである。